



TITLE:

翻訳物としての『南伝大蔵経』

AUTHOR(S):

安岡, 孝一

CITATION:

安岡, 孝一. 翻訳物としての『南伝大蔵経』 . 2014

ISSUE DATE:

2014-01-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/218532>

RIGHT:

翻訳物としての『南伝大蔵経』

安岡孝一*

国立国会図書館が公表した『インターネット提供に対する出版社の申出への対応について』[1]を初めて目にした時、私は、どうにもこうにも納得がいかなかった。

『南伝大蔵経』(1935年～1941年、大蔵出版、全70巻)については、当分の間、インターネット提供は行わず、館内限定の提供を行う。

という結論は、さておくとしても、この文書には『南伝大蔵経』の著作権について何も書かれていなかったからだ。

『大正新脩大蔵経』の著作権保護期間が満了していることについては、同社も争っていない。

というアヤシゲな文章[†]はあっても、『南伝大蔵経』の著作権が現在どうなっているのかは、この文書では全く触れられていない。何とも気持ちが悪いので、少し調べてみることにした。

ために『南伝大蔵経』の第四巻[2]を最初から順に読んでいくと、目次のページに翻訳者の名前が書いてある(図1)。宮本正尊(1893-1983)と渡辺照宏(1907-1977)が、この巻の翻訳者とのことだ。本文には、著者や翻訳者は記されていないようだ(図2)。一方、奥付には、大量の人名が記されている(図3)。奥付でいちばん大きく書かれているのは、監修者の高楠順次郎(1866-1945)だが、日本の一般的な図書目録規則であれば、この図書は

高楠博士功績記念会纂訳『南伝大蔵経』第四巻

というような形で「高楠博士功績記念会」をauthorとして取ることになるだろう。ただ、それはあくまで目録規則がそういうものだ、というだけのことであって、著作権はまた別の話だと思う。

さらに、この『南伝大蔵経』第四巻の凡例(図4)を読む限りでは、この本には元ネタ[3]があるらしい。元ネタの方はパーリ語で書かれていて(図5)、この本は日本語で書かれている(図2)わけだから、まあ、パーリ語から日本語に翻訳したものだと考えるのが妥当だろう。元ネタの編集者はHermann Oldenberg(1854-1920)だが、パーリ語の文章そのものの著者等は記されていない。

では、この『南伝大蔵経』第四巻の著作権は、どうなっているのだろう。少なくとも、元ネタのパーリ語の文章の著作権は、たぶん切れている。監修者の高楠順次郎の著作権も切れている。一方、翻訳者の宮本正尊と渡辺照宏の著作権は、もしそれが著作権として認められるものならば、2014年の現時点では切れていない。

そのような状態であるにもかかわらず、最初に述べた国立国会図書館の文書[1]の中には、宮本正尊や渡辺照宏など、全く登場しない。『南伝大蔵経』の他の巻の翻訳者(附録参照)も、全く登場しない。登場するのは、著作権の切れた高楠順次郎だけであり、かなりミスリーディングというか、アンフェアな文書だということだ。

*京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター

[†]本当に争っていないのなら、この文書自体を国立国会図書館からではなく、第三者機関から出してもらうのがスジだと思うのだが、現実にはそうっていない。

翻訳物としての『大正新脩大蔵経』

では、この国立国会図書館の文書 [1] における『大正新脩大蔵経』の扱いは、はたしてどうなのであろう。高楠順次郎を登場させるだけで、本当に著作権に関しては十分なのだろうか。

『大正新脩大蔵経』(1923 年～1934 年、大正一切経刊行会、全 88 巻)については、インターネット提供を再開する。

という結論なのだが、そこに至る議論において、ミスリーディングやアンフェアな部分が隠されていたりしないのだろうか。

ためしに『大正新脩大蔵経』の第四巻 [4] を最初から読んでいくと、目次のページに、各経典の著者等が書いてある (図 6)。この巻の最初の経典である「仏所行讃五巻」は、著者が馬鳴 (Aśvaghoṣa, 80?-150?) で、翻訳者が曇無讖 (Dharmakṣema, 385-433) のようだ。本文も同様である (図 7)。一方、奥付には、大量の人名が記されている (図 8)。奥付の最初に大きく書かれているのは、高楠順次郎 (1866-1945) と渡辺海旭 (1872-1933) であり、日本の一般的な図書目録規則であれば、この図書は

高楠順次郎、渡辺海旭『大正新脩大蔵経』第四巻

というような形で、高楠順次郎と渡辺海旭を author として取ることになるだろう。ただ、それはあくまで目録規則がそういうものだ、というだけのことであって、著作権はまた別の話だと思う。

この『大正新脩大蔵経』第四巻に収録されている各経典の元ネタは、かならずしも明らかになっていない。出版当時に流布していた他の『大蔵経』と比較した場合でも、やはりところどころ文字が異なっていて、特定の元ネタはないのではないかとすら思える。たとえばこの当時、上海で出版されていた『大蔵経』には、返り点や句点はないし、注すらほとんどない (図 9)。あるいは、日本国内で出版されていた『大蔵経』では、注はあるが返り点がなかったり (図 10)、返り点はあるが注がなかったり (図 11) していた。なお、『大正新脩大蔵経』第四巻で返り点や句点や注を付けたのは、奥付 (図 8) によれば、干潟竜祥 (1892-1991)、寺崎修一 (1896-1936)、小野玄妙 (1883-1939) である。

では、この『大正新脩大蔵経』第四巻に収録されている「仏所行讃五巻」の著作権は、どうなっているのだろうか。原文 (たぶんサンスクリット) を造った馬鳴の著作権は、とっくの昔に切れている。それを漢文に翻訳した曇無讖の著作権も、もちろん切れている。そこに返り点や句点や注をつけた人物については、もしそれが著作権として認められうるとしても、2014 年の現時点では、干潟竜祥だけが存続していて、寺崎修一と小野玄妙は切れている。高楠順次郎と渡辺海旭は、この「仏所行讃五巻」にどう関わったのかわからないのだが、仮にその著作権があったとしても現時点では切れている。

すなわち、干潟竜祥の著作権がもしあるのなら、それだけが存続していて、他は切れているということだ。そのような状態なので、国立国会図書館としても、とりあえず著作権が存続していそうな干潟竜祥を中心に考えればいいはずなのに、くだんの文書 [1] では、高楠順次郎の著作権のことばかりが書かれている。著作権譲渡登録の問題[‡]があるのかもしれないが、それにしても、どうも、どこかおかしい。

[‡]高楠順次郎は 1930 年 12 月に、『大正新脩大蔵経』68 冊の著作権を、大正一切経刊行会 (代表: 小野玄妙) に譲渡登録したらしい [8]。

著作権法と「インターネット 提供」

本稿で私は、『南伝大蔵経』と『大正新脩大蔵経』のインターネット提供を、著作権法第五十一条第二項の問題として、見てきた。

著作権は、この節に別段の定めがある場合を除き、著作者の死後（共同著作物にあつては、最終に死亡した著作者の死後。次条第一項において同じ。）五十年を経過するまでの間、存続する。

しかし、あるいはこの問題を、むしろ、著作権法第三十一条第三項（の前半）の延長線上で扱う、という立場もありなのではないか、と私には思えてきてしまったりしている。

国立国会図書館は、絶版等資料に係る著作物について、図書館等において公衆に提示することを目的とする場合には、前項の規定により記録媒体に記録された当該著作物の複製物を用いて自動公衆送信を行うことができる。

もちろん第三十一条第三項は、図書館向けデジタル化資料送信サービス（2014年1月21日開始[9]）に関するものだが、それでも、どうも気になる。この項の「図書館等において」の部分をつきつくり削除してしまつて、絶版等資料ならインターネットで提供できるようにする、という立場があつてもいいんじゃないかと。

第五十一条第二項は、大量の人名が目次や奥付に記されているようなケースでは、ものすごく手間が増えてしまう。本稿のケースが、まさにそれだ[§]。一方、第三十一条第三項は、絶版等で入手困難かどうかさえ調べればいいし、あるいは出版社に申し立ててもらえばいい。悪用を考慮に入れないければ、遥かに楽ちんである。第三十一条第三項をインターネット提供にも適用できうるなら、それは、絶版等資料の「フェアユース」という道に、もしかしたら繋がっているのではないかと、私自身は夢想してしまう。ただ、その夢想を実現するためには、もちろん、著作権法改正という棘の道が待っているのだが。

参考文献

- [1] 『インターネット提供に対する出版社の申出への対応について』国立国会図書館（2014.1.7）.
<http://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2013/report140107.pdf>
- [2] 高楠博士功績記念会纂訳『南伝大蔵経』第四巻：律蔵四，大蔵出版，東京（1939.2.8）.
- [3] Hermann Oldenberg ed. 『THE VINAYA PITAKAM』 Vol. II: THE CULLAVAGA, Williams and Norgate, London（1880）.
- [4] 高楠順次郎、渡辺海旭『大正新脩大蔵経』第四巻：本縁部下，大正一切経刊行会，東京（1924.7.15）.
- [5] 頻伽精舎校刊『大蔵経』蔵七，頻伽精舎，上海（1913）.
- [6] 大日本校訂『大蔵経』蔵七，弘教書院，東京（1883）.
- [7] 大日本校訂訓点『大蔵経』第二十六套第七，蔵経書院，京都（1904）.
- [8] 著作権譲渡登録，官報，第1183号（1930.12.6），p.191.
- [9] 『図書館向けデジタル化資料送信サービスを開始します』国立国会図書館（2014.1.10）.
http://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2013/_icsFiles/afielddfile/2014/01/09/pr140110.pdf
- [10] 金倉円照：寺崎修一助教授の逝去，文化（東北帝国大学文科会），第3巻，第5号（1936.5），pp.653-654.
- [11] 会員消息，駒沢大学仏教学部論集，第24号（1993.10），p.360.

[§]実際、私自身も、寺崎修一の没年を調査するために、東北帝国大学の紀要『文化』を順にチェック[10]し、東元慶喜（東元多郎）の没年を調査するために、『駒沢大学仏教学部論集』を順にチェック[11]する羽目になった。

目次

律藏四小品

宮本 正尊 譯
渡邊 宏

大品に續き犍度部の後半を成し十二犍度に分たる。

第一羯磨犍度

苦切羯磨依止羯磨驅出羯磨下意羯磨及三種の擧罪羯磨を制定せる因縁とその方法とを説明す。

初誦品 苦切羯磨（一一八）

一〔因縁〕

盤那盧醯の徒の比丘等訴訟等を行ひ不穩當なるによりて苦切羯磨制定せらる。

二 非法羯磨十二事

三 如法羯磨十二事

四 若し欲せば六事

目次

一

図 1: 『南伝大蔵經』第四卷 [2] 目次 1 ページ

II.1

律藏 小品 (チュツラ・ヴツガ)

彼の世尊、應供、正等覺者に歸命す。

第一 羯磨健度

一——その時、佛世尊は舍衛城、祇樹林給孤獨園に住したまへり。その時、サ・ヴツテイ・チエータ・ア・ナ・ア・ナ・タ・ビン・ディ・カ盤那盧醯の徒の比丘等は自ら訴訟し鬭諍し爭論し、僧伽に於て諍事をなすものゝ許に到りて言へり、「具壽等よ、汝等彼の爲に敗らるゝこと勿れ、聲を高くし力めて諍へ、汝等は彼よりも賢能、聰明、多聞、有義なり、彼を畏るゝこと勿れ、我等も亦汝等に黨せん」。爲に未生

図 2: 『南伝大藏經』第四卷 [2] 本文 1 ページ

南傳大藏經

高楠博士功績記念會纂譯

代表者
文學博士 宇井伯壽
文學博士 長井眞琴
文學士 福島直四郎

監修
マスターオブライブラリー
ドクトラルフェロー
文學博士

高楠順次郎

文學博士 渡邊小野	文學博士 山宮永直	文學博士 增福瀧直	文學博士 千羽成龍	文學博士 長田眞勝	文學博士 高橋順次	文學博士 坂本幸男	文學博士 栗原隆男	文學博士 神林雲淨	文學博士 故井來壽	文學博士 宇井伯成	文學博士 阿部得雄
文學士 岡崎密朗	文學士 金澤西成	文學士 蓮澤俊彦	文學士 山宮本照	文學士 松本快正	文學士 藤田誠尊	文學士 平松眞道	文學士 花山友嗣	文學士 成田昌勝	文學士 故寺修信	文學士 高永眞海	文學士 末藤密雄
文學士 佐藤金村	文學士 故金村	文學士 佐藤金村	文學士 佐藤金村	文學士 佐藤金村	文學士 佐藤金村	文學士 佐藤金村	文學士 佐藤金村	文學士 佐藤金村	文學士 佐藤金村	文學士 佐藤金村	文學士 佐藤金村
文學士 石川慶	文學士 石川慶	文學士 石川慶	文學士 石川慶	文學士 石川慶	文學士 石川慶	文學士 石川慶	文學士 石川慶	文學士 石川慶	文學士 石川慶	文學士 石川慶	文學士 石川慶
文學士 青原海	文學士 青原海	文學士 青原海	文學士 青原海	文學士 青原海	文學士 青原海	文學士 青原海	文學士 青原海	文學士 青原海	文學士 青原海	文學士 青原海	文學士 青原海
文學士 故赤沼智	文學士 故赤沼智	文學士 故赤沼智	文學士 故赤沼智	文學士 故赤沼智	文學士 故赤沼智	文學士 故赤沼智	文學士 故赤沼智	文學士 故赤沼智	文學士 故赤沼智	文學士 故赤沼智	文學士 故赤沼智
文學士 石野忍	文學士 石野忍	文學士 石野忍	文學士 石野忍	文學士 石野忍	文學士 石野忍	文學士 石野忍	文學士 石野忍	文學士 石野忍	文學士 石野忍	文學士 石野忍	文學士 石野忍
文學士 小島芳	文學士 小島芳	文學士 小島芳	文學士 小島芳	文學士 小島芳	文學士 小島芳	文學士 小島芳	文學士 小島芳	文學士 小島芳	文學士 小島芳	文學士 小島芳	文學士 小島芳
文學士 金良智	文學士 金良智	文學士 金良智	文學士 金良智	文學士 金良智	文學士 金良智	文學士 金良智	文學士 金良智	文學士 金良智	文學士 金良智	文學士 金良智	文學士 金良智
文學士 佐藤隆	文學士 佐藤隆	文學士 佐藤隆	文學士 佐藤隆	文學士 佐藤隆	文學士 佐藤隆	文學士 佐藤隆	文學士 佐藤隆	文學士 佐藤隆	文學士 佐藤隆	文學士 佐藤隆	文學士 佐藤隆
文學士 田中道	文學士 田中道	文學士 田中道	文學士 田中道	文學士 田中道	文學士 田中道	文學士 田中道	文學士 田中道	文學士 田中道	文學士 田中道	文學士 田中道	文學士 田中道
文學士 立花於	文學士 立花於	文學士 立花於	文學士 立花於	文學士 立花於	文學士 立花於	文學士 立花於	文學士 立花於	文學士 立花於	文學士 立花於	文學士 立花於	文學士 立花於
文學士 西野	文學士 西野	文學士 西野	文學士 西野	文學士 西野	文學士 西野	文學士 西野	文學士 西野	文學士 西野	文學士 西野	文學士 西野	文學士 西野
文學士 林等	文學士 林等	文學士 林等	文學士 林等	文學士 林等	文學士 林等	文學士 林等	文學士 林等	文學士 林等	文學士 林等	文學士 林等	文學士 林等
文學士 平野	文學士 平野	文學士 平野	文學士 平野	文學士 平野	文學士 平野	文學士 平野	文學士 平野	文學士 平野	文學士 平野	文學士 平野	文學士 平野
文學士 逸見	文學士 逸見	文學士 逸見	文學士 逸見	文學士 逸見	文學士 逸見	文學士 逸見	文學士 逸見	文學士 逸見	文學士 逸見	文學士 逸見	文學士 逸見
文學士 山水崎	文學士 山水崎	文學士 山水崎	文學士 山水崎	文學士 山水崎	文學士 山水崎	文學士 山水崎	文學士 山水崎	文學士 山水崎	文學士 山水崎	文學士 山水崎	文學士 山水崎
文學士 山崎	文學士 山崎	文學士 山崎	文學士 山崎	文學士 山崎	文學士 山崎	文學士 山崎	文學士 山崎	文學士 山崎	文學士 山崎	文學士 山崎	文學士 山崎
文學士 智良教	文學士 智良教	文學士 智良教	文學士 智良教	文學士 智良教	文學士 智良教	文學士 智良教	文學士 智良教	文學士 智良教	文學士 智良教	文學士 智良教	文學士 智良教
文學士 弘順	文學士 弘順	文學士 弘順	文學士 弘順	文學士 弘順	文學士 弘順	文學士 弘順	文學士 弘順	文學士 弘順	文學士 弘順	文學士 弘順	文學士 弘順
文學士 梅榮	文學士 梅榮	文學士 梅榮	文學士 梅榮	文學士 梅榮	文學士 梅榮	文學士 梅榮	文學士 梅榮	文學士 梅榮	文學士 梅榮	文學士 梅榮	文學士 梅榮
文學士 通昭	文學士 通昭	文學士 通昭	文學士 通昭	文學士 通昭	文學士 通昭	文學士 通昭	文學士 通昭	文學士 通昭	文學士 通昭	文學士 通昭	文學士 通昭
文學士 五邦	文學士 五邦	文學士 五邦	文學士 五邦	文學士 五邦	文學士 五邦	文學士 五邦	文學士 五邦	文學士 五邦	文學士 五邦	文學士 五邦	文學士 五邦
文學士 義雄	文學士 義雄	文學士 義雄	文學士 義雄	文學士 義雄	文學士 義雄	文學士 義雄	文學士 義雄	文學士 義雄	文學士 義雄	文學士 義雄	文學士 義雄
文學士 義照	文學士 義照	文學士 義照	文學士 義照	文學士 義照	文學士 義照	文學士 義照	文學士 義照	文學士 義照	文學士 義照	文學士 義照	文學士 義照
文學士 義道	文學士 義道	文學士 義道	文學士 義道	文學士 義道	文學士 義道	文學士 義道	文學士 義道	文學士 義道	文學士 義道	文學士 義道	文學士 義道
文學士 義彌	文學士 義彌	文學士 義彌	文學士 義彌	文學士 義彌	文學士 義彌	文學士 義彌	文學士 義彌	文學士 義彌	文學士 義彌	文學士 義彌	文學士 義彌
文學士 義隆	文學士 義隆	文學士 義隆	文學士 義隆	文學士 義隆	文學士 義隆	文學士 義隆	文學士 義隆	文學士 義隆	文學士 義隆	文學士 義隆	文學士 義隆
文學士 義俊	文學士 義俊	文學士 義俊	文學士 義俊	文學士 義俊	文學士 義俊	文學士 義俊	文學士 義俊	文學士 義俊	文學士 義俊	文學士 義俊	文學士 義俊
文學士 義忍	文學士 義忍	文學士 義忍	文學士 義忍	文學士 義忍	文學士 義忍	文學士 義忍	文學士 義忍	文學士 義忍	文學士 義忍	文學士 義忍	文學士 義忍
文學士 義善	文學士 義善	文學士 義善	文學士 義善	文學士 義善	文學士 義善	文學士 義善	文學士 義善	文學士 義善	文學士 義善	文學士 義善	文學士 義善

發行所
大藏出版株式會社
電話 小石川 六一四一
振替東京五一六八四番

東京市本郷區本郷三丁目二

製本所 村田文泉閣

印刷所 單式印刷株式會社

東京市芝區芝浦一丁目二三

印刷者 森下笑吉

編輯兼 小野玄妙

發行者 東京市本郷區本郷三丁目二
大藏出版株式會社

昭和十四年二月五日 印刷
昭和十四年二月八日 發行

第四卷

號番員會

【品賣非】

図 3: 『南伝大藏經』第四卷 [2] 奥付

凡 例

一、今巻依用の底本は Hermann Oldenberg 刊行本 (London, 1880) にして兼て暹羅版を参照せり。

一、本譯者は前に刊行せる律藏大品と同じく Hermann Oldenberg and Rhys Davids 共譯の英譯律藏及立花俊道氏和譯を参照せり。

一、本文行頭に羅馬數字を以て底本の頁數を附し、彼此參看に便せり。

一、文中「」印を以て括せる語又は句は譯者の挿入せるものなり。

一、文中……或は……乃至……とあるは、底本に然く省略せるものにして〔……〕或は〔……乃至……〕とあるは、譯者が便宜上省略せるものなり。

一、文字の右肩に附せる白拔羅馬數字は註の對照番號にして、註の文は各捷度末に之を出したり。

一、固有名詞の中、その音譯が漢譯律中に存するものは可及的に之を採り巴利

凡

例

一

図 4: 『南伝大藏經』第四卷 [2] 凡例 1 ページ

VINAYAPITAKAM.

CULLAVAGGA.

Namo tassa bhagavato arahato sammâsambuddhassa.

I.

Tena samayena buddho bhagavâ Sâvatthiyam viharati Jetavane Anâthapiṇḍikassa ârâme. tena kho pana samayena Paṇḍukalohitakâ bhikkhû attanâ bhaṇḍanakâ-rakâ kalahakârakâ vivâdakârakâ bhassakârakâ saṃghe adhi-karaṇakârakâ, ye pi c' aññe bhikkhû bhaṇḍanakârakâ kalahakârakâ vivâdakârakâ bhassakârakâ saṃghe adhikara-ṇakârakâ te upasaṃkamitvâ evaṃ vadenti: mâ kho tumhe âyasmanto eso ajesi, balavâbalavaṃ patimantetha, tumhe tena paṇḍitatarâ ca vyattatarâ ca bahussutatarâ ca alamattathatarâ ca, mâ c' assa bhâyittha, mayam pi tumhâkaṃ pakkhâ bhavissâmâ 'ti. tena anuppannâni c' eva bhaṇḍanâni uppa-jjanti uppannâni ca bhaṇḍanâni bhiyyobhâvâya vepullâya saṃvattanti. ||1|| ye te bhikkhû appicchâ te ujjhâyanti khîyanti vipâcenti: katham hi nâma Paṇḍukalohitakâ bhikkhû attanâ bhaṇḍanakârakâ . . . adhikaraṇakârakâ ye pi c' aññe bhikkhû bhaṇḍanakârakâ . . . adhikaraṇakârakâ te upasaṃkamitvâ evaṃ vakkhanti: mâ kho . . . saṃva-ttantîti. atha kho te bhikkhû bhavagato etam attham ârocesum. atha kho bhagavâ etasmim nidâne etasmim pakarane bhikkhusaṃgham sannipâtâpetvâ bhikkhû paṭi-pucchi: saccam kira bhikkhave Paṇḍukalohitakâ bhikkhû atta-

VOL. II.

1

目次

一九二 佛所行讚（五卷）……………馬鳴菩薩造……………北涼曇無讖譯……………一

(一) 生品 (一)……………	一
(二) 處宮品 (一)……………	三
(三) 厭患品 (一)……………	五
(四) 離欲品 (一)……………	六
(五) 出城品 (一)……………	八
(六) 車匿還品 (一)……………	一〇
(七) 入苦行林品 (一)……………	一一
(八) 合宮憂悲品 (一)……………	一四
(九) 推求太子品 (一)……………	一六
(一〇) 瓶沙王詣太子品 (一)……………	一九
(一一) 答瓶沙王品 (一)……………	二〇
(一二) 阿羅藍鬘頭藍品 (一)……………	二二
(一三) 破魔品 (一)……………	二五
(一四) 阿惟三菩提品 (一)……………	二六

一九三 佛本行經（七卷）……………宋釋寶雲譯……………五四

(一) 因緣品 (一)……………	五四
(二) 稱歎如來品 (一)……………	五五
(三) 降胎品 (一)……………	五七
(四) 如來生品 (一)……………	五八
(五) 梵志占相品 (一)……………	五九
(六) 阿夷決疑品 (一)……………	六〇
(七) 入學論品 (一)……………	六一

(五) 轉法輪品 (三)……………	二八
(六) 瓶沙王諸弟子品 (四)……………	三〇
(七) 大弟子出家品 (四)……………	三三
(八) 化給孤獨品 (四)……………	三四
(九) 父子相見品 (四)……………	三六
(一〇) 受祇桓精舍品 (四)……………	三八
(一一) 守財醉象調伏品 (四)……………	四〇
(一二) 菴摩羅女見佛品 (四)……………	四一
(一三) 神力住壽品 (五)……………	四二
(一四) 離車辭別品 (五)……………	四四
(一五) 涅槃品 (五)……………	四五
(一六) 大般涅槃品 (五)……………	四七
(一七) 歎涅槃品 (五)……………	五〇
(一八) 分舍利品 (五)……………	五二
(一九) 與衆嫁女遊居品 (三)……………	六三
(二〇) 現憂懼品 (三)……………	六四
(二一) 閻浮提樹蔭品 (三)……………	六六
(二二) 出家品 (三)……………	六七
(二三) 車匿品 (三)……………	六九
(二四) 瓶沙王問事品 (三)……………	七〇
(二五) 爲瓶沙王說法品 (三)……………	七二

図 6: 『大正新脩大藏經』第四卷 [4] 目次 1 ページ

No. 192

佛所行讚卷第一 〔亦云佛本行經〕

馬鳴菩薩造

北涼天竺三藏曇無讖譯

生品第一

甘蔗之苗裔 釋迦無勝王
淨財德純備 故名曰淨飯
群生樂瞻仰 猶如初生月
王如天帝釋 夫人猶含脂
執志安如地 心淨若蓮花
假譬名摩耶 其實無倫比
於彼象天后 降神而處胎
母悉離憂患 不生幻偽心
厭惡彼誼俗 樂處空閑林
藍毘尼勝園 流泉花果茂
寂靜順禪思 啓王請遊彼
王知其志願 而生奇特想
勅內外眷屬 俱詣彼園林
爾時摩耶后 自知產時至
偃寢安勝床 百千姪女侍
時四月八日 清和氣調適
齋戒修淨德 菩薩右脇生
大悲救世間 不令母苦惱
優留王股生 昇伽王手生
曼陀王頂生 伽叉王腋生
菩薩亦如是 誕從右脇生
漸漸從胎出 光明普照耀

如從虛空墮 不由於生門
修德無量劫 自知生不²⁰死
安諦不傾動 明顯妙端嚴
晃然²¹後胎現 猶如日初昇
觀察極明耀 而不害眼根
縱視而不耀 如觀空中月
自身光照耀 如日奪燈明
菩薩真金身 普照亦如是
正²²真心不亂 安庠行七步
足下安平趾 炳徹猶七星
獸王師子步 觀察於四方
通達真實義 堪能如是說
此生爲佛生 則爲後邊生
我唯此一生 當度於一切
應時虛空中 淨水雙流下
一溫一清涼 灌頂令身樂
安處寶宮殿 臥於琉璃床
天王金華手 執持寶蓋侍
諸天於空中 勸發成佛道
承威神讚歎 渴仰殊勝法
曾奉過去佛 今得值菩薩
散²³曼陀羅花 專心樂供養
如來出興世 淨居天歡喜
已除愛欲歡 爲法而欣悅
衆生沒苦海 令得解脫故
須彌寶山王 堅持此大地
菩薩出興世 功德風所飄
普皆大震動 如風鼓浪舟

梅檀細末香 衆寶蓮花藏
風吹隨空流 續紛而亂墜
天衣從空下 觸身生妙樂
日月如常度 光耀倍增明
世界諸火光 無薪自炎熾
淨水清涼井 前後自然生
中宮嫫女衆 怪歎未曾有
競赴而飲浴 皆起安樂想
無量部多天 樂法悉雲集
於藍毘尼園 遍滿林樹間
奇特衆妙花 一時生慈心
凶暴衆生類 不療自然除
世間諸疾病 恬默寂無聲
亂鳴諸禽獸 濁水悉澄清
萬川皆停流 天鼓自然鳴
空中無雲翳 悉得安隱樂
一切諸世間 忽得賢明主
猶如荒難國 爲濟世衆苦
菩薩所以生 唯彼²⁴魔王
父王見生子 奇特未曾有
素性雖安重 驚駭改常容
二息交胸起 一喜復一懼
夫人見其子 不由常道生
女人性怯弱 悚惕懷永炭
不別吉凶相 反更生憂怖
長宿諸母人 互亂祈神明
各請常所事 願令太子安
時彼林中有 知相婆羅門

①佛所行讚(經)②, Buddha-carita. ③〔亦云…經〕六字一④ ⑤Aśvaghoṣa. ⑥造一撰⑦ ⑧1 Bhagavatprāsūti-sarṅga; 漢譯ニハ原本ノ最初ニアル二十四頌ヲ缺ク ⑨故名ニ名故⑩ ⑪Suddhodana. ⑫Sāsī. ⑬Māyā. ⑭象ニ像⑮ ⑯彼誼ニ誼譯⑰ ⑱Lumbinī. ⑲順ニ樂⑳ ㉑時ニ於㉒ ㉓清ニ時㉔ ㉕Aurva. ㉖Prā. ㉗Mādhātṛ. ㉘Kakṣivat. ㉙死ニ亂㉚ ㉛後ニ從㉜ ㉝真ニ直㉞ ㉟安庠ニ庠序㊱㊲安詳㊳ ㊴奉ニ捧㊵㊶ ㊷Māndārāpuṣpa. ㊸Suddhādhivāsa. ㊹Candana. ㊺Blūta-apa. ㊻區ニ瓦㊼ ㊽恬默寂ニ寂默㊾ ㊿Mārasvata. ㊽震動大愛ニ獨愛而不悅㊾ ㊿二息交胸起ニ自慮安心㊾

図 7: 『大正新脩大藏經』第四卷 [4] 本文 1 ページ

大正新修大藏經

第一校合所
(顯、宋、元、明、藏) 芝罘上寺閣藏亭

文士 石川 海 淨
文士 瀧野 時之助
文士 松本 德明
文士 末永 眞海
文士 大塚 眞光
文士 岸宏之

文士 千中 葉秀
文士 三野 義照
文士 和田 明永
文士 安藤 環中
文士 藤環 中城

第二校合所
(正倉院聖蹟藏天平寫經上野帝室博物館)

文士 山本 快龍
文士 西本 義雄
文士 山崎 精華
文士 加點及原語註

文士 近藤 隆晃
文士 坂本 幸男
文士 寺崎 修一
文士 小野 玄妙

第三校合所
(舊東照宮寺本宮内省圖書寮)

文士 飯田 眞一
文士 八雲 圓成
文士 永藤 季維
文士 小野 玄妙

文士 潮留 眞澄
文士 野津 善昌
文士 魚形 清法
文士 堀尾 順我

編纂排印

文士 菅原 法嶺
文士 飯田 眞一
文士 八雲 圓成
文士 永藤 季維
文士 小野 玄妙

文士 潮留 眞澄
文士 野津 善昌
文士 魚形 清法
文士 堀尾 順我

外校訂員七名・校正員五名・索隱補二名・事務五名。

文士 藤矢 堂祐
文士 知恩院天平寫經校合
文士 醍醐寺萬徳寺大徳寺
文士 天平寫經校合
文士 高野山藏校合

渡邊海旭

文士 高楠順次郎
文士 高楠順次郎
文士 高楠順次郎
文士 高楠順次郎
文士 高楠順次郎

發行所

大正一切經刊行會

電話 牛込七八八番
振替 東京六三三〇八番
振替 長野三三五六番

THE TRIPITAKA IN CHINESE

Revised, collated, Added, Rearranged and Edited
BY
Prof. J. TAKAKUSU
Prof. K. WATANABE

Published by
THE TAISHO ISSAI-KYO KANKO KWAI
(Society for the Publication of the Taisho Edition of the Tripitaka)
No. 5 Sakiguchi-Daimachi, Koishikawa, Tokyo

編輯兼發行所

高楠順次郎

東京市麹町區飯田町二丁目五十番地

印刷所

大正一切經刊行會印刷所

東京市小石川區關口臺町五番地

位順入加員會

(品賣非)

第四卷本緣部下

大正十三年六月三十日印刷
大正十三年七月十五日發行

図 8: 『大正新修大藏經』第四卷 [4] 奥付

大 藏 經

佛所行讚卷第一
本亦曰經佛

生品第一

甘蕉之苗裏	釋迦無勝王	淨財德純備	故名曰淨飯	羣生樂瞻仰	猶如初生月	王如天帝釋
夫人猶舍脂	執志安如地	心淨若蓮花	假譬名摩耶	其實無倫比	於彼象天后	降神而處胎
母悉離憂患	不生幻僞心	厭惡彼諠俗	樂處空閑林	藍毘尼勝園	流泉花果茂	寂靜順禪思
啓王請遊彼	王知其志願	而生奇特想	勅内外眷屬	俱詣彼園林	爾時摩耶后	自知產時至
偃寢安勝牀	百千姦女侍	時四月八日	清和氣調適	齋戒修淨德	菩薩右脇生	大悲救世間
不令母苦惱	優留王股生	昇偷王手生	曼陀王頂生	伽叉王腋生	菩薩亦如是	誕從右脇生
漸漸從胎出	光明普照耀	如從虛空墮	不由於生門	修德無量劫	自知生不死	安諦不傾動
明顯妙端嚴	晃然後胎現	猶如日初昇	觀察極明耀	而不害眼根	縱視而不耀	如觀空中月
自身光照耀	如日奪燈明	菩薩真金身	普照亦如是	正真心不亂	安庠行七步	足下安平趾
炳徹猶七星	獸王師子步	觀察於四方	通達真實義	堪能如是說	此生爲佛生	則爲後邊生
我唯此一生	當度於一切	應時虛空中	淨水雙流下	一溫一清涼	灌頂令身樂	安處寶宮殿
臥於琉璃牀	天王金華手	奉持牀四足	諸天於空中	執持寶蓋侍	承威神讚歎	勸發成佛道
諸龍王歡喜	渴仰殊勝法	曾奉過去佛	今得值菩薩	散曼陀羅花	專心樂供養	如來出興世
淨居天歡喜	已除愛欲歡	爲法而欣悅	衆生沒苦海	令得解脫故	須彌寶山王	堅持此大地
菩薩出興世	功德風所飄	普皆大震動	如風鼓浪舟	梅檀細末香	衆寶蓮花藏	風吹隨空流
繽紛而亂墜	天衣從空下	觸身生妙樂	日月如常度	光耀倍增明	世界諸火光	無薪自炎熾

馬鳴菩薩造
北涼天竺三藏曇無讖譯

図 9: 図 7 の異本の一つ [5] 四十四乙

撰述一	佛所行讚卷第一 亦曰佛本行經	生品第一	馬鳴菩薩造 北凉天竺三藏曇無讖譯
首題讀下三本 俱有經字同下 同無亦曰等六 字○撰號造同 作撰下每卷同	故名同作名故	甘蕉之苗裏	釋迦無勝王
象同作像	夫人猶舍脂	執志安如地	心淨若蓮花
彼誼同作誼譚	母悉離憂患	不生幻偽心	厭惡彼誼俗
○順同作樂	啓王請遊彼	王知其志願	而生奇特想
時同作於○清	偃寢安勝牀	百千姝女侍	時四月八日
同作時	不令母苦惱	優留王股生	畢儉王手生
死同作亂	漸漸從胎出	光明普照耀	如從虛空墮
後同作從	明顯妙端嚴	晃然後胎現	猶如日初昇
眞同作直○安	自身光照耀	如日奪燈明	菩薩眞金身
庠宋元俱作庠	炳徹猶七星	獸王師子步	觀察於四方
序明作安詳	我唯此一生	當度於一切	應時虛空中
奉元明俱作捧	臥於琉璃牀	天王金華手	奉持牀四足
隨三本俱作騰	諸龍王歡喜	渴仰殊勝法	曾奉過去佛
炎元明俱作焰	淨居天歡喜	已除愛欲歡	爲法而欣悅
	菩薩出興世	功德風所飄	普皆大震動
	繽紛而亂墜	天衣從空下	觸身生妙樂
			日月如常度
			光耀倍增明
			世界諸火光
			無薪自炎燄
			猶如初生月
			王如天帝釋
			降神而處胎
			於彼象天后
			流泉花果茂
			寂靜順禪思
			爾時摩耶后
			自知產時至
			菩薩右脇生
			大悲救世間
			菩薩亦如是
			誕從右脇生
			自知生不死
			安諦不傾動
			縱視而不耀
			如觀空中月
			安庠行七步
			足下安平趾
			則爲後邊生
			安處寶宮殿
			勸發成佛道
			承威神讚歎
			專心樂供養
			如來出興世
			須彌寶山王
			堅持此大地
			衆寶蓮花藏
			風吹隨空流

図 10: 図 7 の異本の一つ [6] 四十四乙

佛所行讚卷第一〔亦云佛本行經〕

馬鳴菩薩造
北涼天竺三藏曇無讖譯

生品第一

甘蔗之苗發	釋迦無勝王	淨財德純備
故名曰淨飯	羣生樂瞻仰	猶如初生月
王如天帝釋	夫人猶舍脂	執志安如地
心淨若蓮華	假譬名摩耶	其實無倫比
於彼象天后	降神而處胎	母悉離憂患
不生幻僞心	厭惡彼諠俗	樂處空閑林
藍毗尼勝園	流泉華果茂	寂靜順禪思
啓王請遊彼	王知其志願	而生奇特想
敕内外眷屬	俱詣彼園林	爾時摩耶后
自知產時至	偃寢安勝牀	百千姝女侍
時四月八日	清和氣調適	齋戒修淨德
菩薩右脇生	大悲救世間	不令母苦惱
優留王股生	卑偷王手生	曼陀王頂生
伽叉王腋生	菩薩亦如是	誕從右脇生
漸漸從胎出	光明普照耀	如從虛空墮
不由於生門	修德無量劫	自知生不死

安諦不傾動	明顯妙端嚴	晃然後胎現
猶如日初昇	觀察極明耀	而不害眼根
縱視而不耀	如觀空中月	自身光照耀
如日奪燈明	菩薩眞金身	普照亦如是
正眞心不亂	安庠行七步	足下安平趾
炳徹猶七星	獸王師子步	觀察於四方
通達眞實義	堪能如是說	此生爲佛生
則爲後邊生	我唯此一生	當度於一切
應時虛空中	淨水雙流下	一溫一清涼
灌頂令身樂	安處寶宮殿	臥於瑠璃牀
天王金華手	奉持牀四足	諸天於空中
執持寶蓋侍	承威神讚歎	勸發成佛道
諸龍王歡喜	渴仰殊勝法	曾奉過去佛
今得值菩薩	散曼陀羅華	專心樂供養
如來出興世	淨居天歡喜	已除愛欲歡
爲法而欣悅	衆生沒苦海	令得解脫故
須彌寶山王	堅持此大地	菩薩出興世
功德風所飄	普皆大震動	如風鼓浪舟
旃檀細末香	衆寶蓮華藏	風吹隨空流
繽紛而亂墜		

図 11: 図 7 の異本の一つ [7] 六百二十四乙

附録：『南伝大蔵経』各巻の翻訳者

『南伝大蔵経』の翻訳者を、各巻ごとに以下に示す。没年が判明している場合は、角カッコもしくは丸カッコで付記した。他に情報をご存じの方は、ぜひ私(安岡孝一)まで御教示いただきたい。

- 第一巻 上田天瑞 (1974)
- 第二巻 上田天瑞 (1974)
- 第三巻 渡辺照宏 (1977)
- 第四巻 宮本正尊 (1983) 渡辺照宏 (1977)
- 第五巻 上田天瑞 (1974)
- 第六巻 宇井伯寿 [1963] 羽溪了諦 (1974) 長井真琴 (1970) 久野芳隆 [1944] 赤沼智善 [1937]
木村泰賢 [1930] 金倉円照 (1987) 荻原雲来 [1937] 坂本幸男 (1973) 花山信勝 (1995)
山田竜城 (1979) 平等通昭 (1993)
- 第七巻 寺崎修一 [1936] 平等通昭 (1993) 干潟竜祥 (1991) 山本快竜 [1948] 阿部文雄 (1977)
小野島行忍 [1948] 石川海浄 (1969) 水野弘元 (2006)
- 第八巻 中野義照 (1977) 青原慶哉 [1945] 久野芳隆 [1944] 西義雄 (1993) 成田昌信
逸見梅栄 (1977) 神林隆浄 [1963] 立花俊道 [1955] 渡辺樗雄 (1978)
- 第九巻 干潟竜祥 (1991)
- 第十巻 干潟竜祥 (1991)
- 第十一巻上 青原慶哉 [1945]
- 第十一巻下 渡辺樗雄 (1978)
- 第十二巻 赤沼智善 [1937]
- 第十三巻 林五邦 [1938]
- 第十四巻 渡辺照宏 (1977)
- 第十五巻 立花俊道 [1955]
- 第十六巻上 立花俊道 [1955] 渡辺照宏 (1977)
- 第十六巻下 渡辺照宏 (1977)
- 第十七巻 荻原雲来 [1937]
- 第十八巻 荻原雲来 [1937]
- 第十九巻 荻原雲来 [1937]
- 第二十巻 荻原雲来 [1937] 土田勝弥 [1959]
- 第二十一巻 渡辺照宏 (1977)
- 第二十二巻上 渡辺照宏 (1977)
- 第二十二巻下 渡辺照宏 (1977)
- 第二十三巻 宮田菱道 (1990) 福島直四郎 (1979) 増永霊鳳 (1981) 石黒弥致
- 第二十四巻 水野弘元 (2006)
- 第二十五巻 宮田菱道 (1990) 増永霊鳳 (1981)
- 第二十六巻 高田修 (2006)
- 第二十七巻 山崎良順 (1996)
- 第二十八巻 立花俊道 [1955] 長井真琴 (1970) 山田竜城 (1979) 石川海浄 (1969) 山本快竜 [1948]
- 第二十九巻 栗原広廓 (1977) 長井真琴 (1970) 立花俊道 [1955] 寺崎修一 [1936] 渡辺樗雄 (1978)
青原慶哉 [1945]
- 第三十巻 立花俊道 [1955] 長井真琴 (1970) 金倉円照 (1987) 高田修 (2006)
- 第三十一巻 立花俊道 [1955] 石川海浄 (1969) 和泉得成 (1988) 高田修 (2006) 藤田真道 (1987)
寺崎修一 [1936]

- 第三十二卷 立花俊道 [1955] 青原慶哉 [1945] 山本快竜 [1948] 石川海浄 (1969)
第三十三卷 渡辺棟雄 (1978) 栗原広廓 (1977) 石川海浄 (1969) 山田竜城 (1979) 水野弘元 (2006)
第三十四卷 高田修 (2006) 山本智教 (1998) 平等通昭 (1993)
第三十五卷 高田修 (2006) 山本快竜 [1948] 田中於菟弥 (1989) 立花俊道 [1955]
第三十六卷 立花俊道 [1955] 高田修 (2006)
第三十七卷 高田修 (2006)
第三十八卷 高田修 (2006)
第三十九卷 栗山徳翁 高田修 (2006)
第四十卷 渡辺照宏 (1977)
第四十一卷 渡辺照宏 (1977) 立花俊道 [1955] 松濤誠廉 (1979)
第四十二卷 水野弘元 (2006)
第四十三卷 水野弘元 (2006)
第四十四卷 水野弘元 (2006)
第四十五卷 佐藤良智 (1978)
第四十六卷 佐藤密雄 (2000)
第四十七卷 佐藤密雄 (2000) 末永真海 [1940] 平松友嗣
第四十八卷上 渡辺照宏 (1977)
第四十八卷下 渡辺照宏 (1977)
第四十九卷 渡辺照宏 (1977)
第五十卷 山崎良順 (1996)
第五十一卷 山崎良順 (1996)
第五十二卷 山崎良順 (1996)
第五十三卷 山崎良順 (1996)
第五十四卷 山崎良順 (1996)
第五十五卷 山崎良順 (1996)
第五十六卷 山崎良順 (1996)
第五十七卷 佐藤密雄 (2000) 佐藤良智 (1978)
第五十八卷 佐藤良智 (1978)
第五十九卷上 金森西俊
第五十九卷下 金森西俊
第六十卷 平松友嗣 立花俊道 [1955]
第六十一卷 東元多郎 (1993) 立花俊道 [1955]
第六十二卷 水野弘元 (2006)
第六十三卷 水野弘元 (2006)
第六十四卷 水野弘元 (2006)
第六十五卷 長井真琴 (1970) 水野弘元 (2006) 宇井伯寿 [1963]